

原 著

病院薬剤師の職業性ストレス 第2報 薬学公務員との比較

井奈波良一¹⁾, 日置 敦巳²⁾¹⁾, 中村 光浩³⁾¹⁾岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野²⁾松波総合病院診療局³⁾岐阜薬科大学実践薬学大講座医薬品情報学

(平成 28 年 9 月 29 日受付)

要旨：【目的】病院薬剤師の職業性ストレスの度合いを明らかにする。

【方法】病院薬剤師 314 名（男性 154 名，女性 160 名）および薬学公務員は 76 名（男性 58 名，女性 18 名）を対象に，職業性ストレスに関する自記式アンケート調査結果について比較した。

【結果】1. 仕事でストレスを感じている対象者の割合は，男女共に病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差はなかった。2. 年齢を調整したストレスの原因と考えられる因子の素点平均に関して，男女共に「自覚的な身体的負担度」および「職場の対人関係でのストレス」において病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった ($p < 0.01$)。3. 仕事のストレス判定図から読み取った「総合した健康リスク」は，標準集団の 100 に対して，男性では病院薬剤師が 104.5 で薬学公務員の 92.1 よりやや高かったが，女性では病院薬剤師が 96.6，薬学公務員が 96.8 で差がなかった。4. 男性では，年齢を調整した「勤務環境」のストレス総合点は，病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった ($p < 0.01$)。一方，女性では，いずれの要因のストレス総合点も，病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差はなかった。

【結論】薬剤師が勤務するにあたって感じるストレスの度合いには，「勤務環境」ストレスの度合いが，特に男性において，病院薬剤師と薬学公務員の間で差があることがわかった。

(日職災医誌, 66:149—155, 2018)

—キーワード—

薬剤師, 病院, 職業性ストレス

はじめに

著者らは，前報¹⁾で，病院勤務の薬剤師を対象に職業性ストレスに関するアンケート調査を行った結果，男女共に約 85% の病院薬剤師が仕事でストレスを感じ，ストレスの原因と考えられる因子の中のすべての項目の素点平均には，年齢と調剤業務歴を調整しても有意な男女差はなかった。しかし，年齢と調剤業務歴を調整した「基本的業務」²⁾および「雇用・将来」²⁾のストレス総合点は，男性が女性より有意に高く，逆に「職業的自立・専門性」²⁾のストレス総合点は，男性が女性より有意に低かったことから，病院薬剤師が感じる職業性ストレスには，性差があることを報告した。しかし，病院薬剤師が感じる職業性ストレスの度合いについては必ずしも明らかになったわけではなく，このためには他職種と比較する必要がある。

薬剤師が関係する職種には，病院薬剤師の他に，薬局

薬剤師，医薬情報担当者，行政職などがある。そこで今回，病院薬剤師の職業ストレスの度合いを明らかにする目的で，その手始めとして仕事の内容が著しく異なる病院薬剤師と行政職の薬学公務員の職業ストレスを比較したので報告する。

対象と方法

A 県内の病院に勤務する薬剤師 495 名および A 県に勤める薬学公務員 84 名を対象に，無記名自記式のアンケート調査を郵送で実施した。なお本調査に先立ち，岐阜大学大学院医学系研究科医学研究等倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 24-103）。

調査票の内容は，性，年齢，調剤業務歴(年月)，平均睡眠時間，旧労働省で開発された職業性ストレス簡易調査票のうちストレスの原因と考えられる因子 17 項目，ストレス反応に影響を与える他の因子(ストレス緩和因子) 8 項目(計 25 項目)³⁾，および中嶋ら²⁾の保険薬局薬剤師調

査票（仕事で感じるストレスの度合いおよび勤務するにあたって感じるストレス 55 項目）のうち病院薬剤師および薬学公務員に共通すると考えられる 19 項目である。各質問に対して、ストレスが「大いにある」、「多少ある」、「あまりない」、「まったくない」で回答を求めた。

対象者のストレスプロフィールを作成するために、調査した職業性ストレス 25 項目を、判定基準³⁾に従って、ストレスの原因と考えられる因子を「心理的な仕事の負担（量）」、「同（質）」、「自覚的な身体的負担度」、「職場の対人関係でのストレス」等に 9 分類し、さらにストレス緩和因子を「上司からのサポート」、「同僚からのサポート」、「仕事満足度」および「家庭生活の満足度」に 4 分類し、分類した項目それぞれについて素点を算出した。職業性ストレスによる健康リスクを判定するために、職業性ストレス簡易調査票用の仕事のストレス判定図³⁾を用いた。

勤務するにあたって感じるストレス 19 項目を、中嶋らの判定基準²⁾に従って、「基本的業務」、「職業的自立・専門性」、「勤務環境」および「雇用・将来」に 4 分類し、元の 19 項目および分類した項目それぞれについて素点を算出した。なお、ストレスが「大いにある」から順に 4, 3, 2, 1 点に点数化した。

調査は 2012 年 9 月に実施し、病院薬剤師は 314 名（男性 154 名、女性 160 名）（回収率 63.4%）、薬学公務員は 76 名（男性 58 名、女性 18 名）（回収率 90.5%）から回答を得た。

各項目の職種差について男女別に解析した。各アンケート項目に対して無回答の場合は、その項目の解析から除外した。結果は、平均値±標準誤差で示した。有意差検定には、 χ^2 検定、t 検定、平行線の検定後、共分散分析または分散分析を用い、 $p < 0.05$ で有意差ありと判定した。

結 果

対象者の年齢は、男性では病院薬剤師（39.6±0.9 歳）が薬学公務員（45.5±1.4 歳）より有意に低く（ $p < 0.01$ ）、女性では病院薬剤師（37.0±0.9 歳）と薬学公務員（38.8±2.5 歳）で有意差はなかった。対象者の調剤業務歴は、男性では病院薬剤師（14.6±0.9 年）が薬学公務員（1.7±0.4 年）より有意に長く（ $p < 0.01$ ）、女性も病院薬剤師（11.0±0.7 年）では薬学公務員（3.5±1.0 年）より有意に長かった（ $p < 0.01$ ）。

年齢を調整した結果、平均睡眠時間は、男性では病院薬剤師（6.2±0.1 時間）と薬学公務員（6.3±0.1 時間）で有意差はなかったが、女性では病院薬剤師（6.0±0.1 時間）が薬学公務員（6.6±0.2 時間）より有意に短かった（ $p < 0.05$ ）。

仕事でストレスを感じている対象者の割合は、男性では、病院薬剤師が 83.3%、薬学公務員が 86.2% で有意差が

なかった。一方、女性では、病院薬剤師が 85.4%、薬学公務員が 100.0% で有意差はなかった。

表 1-1 および 1-2 に対象者のストレスの原因と考えられる因子の年齢を調整した素点を男女別に示した。男性では、「心理的な仕事の負担（量）」「同（質）」「自覚的な身体的負担度」「職場の対人関係でのストレス」および「あなたの技能の活用度」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった（ $p < 0.01$ または $p < 0.05$ ）。一方、「仕事のコントロール度」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に低かった（ $p < 0.05$ ）。女性では、「自覚的な身体的負担度」「職場の対人関係でのストレス」および「あなたの技能の活用度」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった（ $p < 0.01$ または $p < 0.05$ ）。

表 2-1 および 2-2 に対象者のストレス緩和因子の年齢を調整した素点を男女別に示した。男性では、「仕事の満足度」および「仕事や生活の満足度」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に低かった（ $p < 0.01$ または $p < 0.05$ ）。女性では、いずれの項目も、病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差はなかった。

以上の結果を用いて仕事のストレス判定図から読み取った「総合した健康リスク」は、標準集団の 100 に対して、男性では病院薬剤師が 104.5 で薬学公務員の 92.1 よりやや高かったが、女性では病院薬剤師が 96.6、薬学公務員が 96.8 で差がなかった。

表 3-1 および 3-2 に対象者の勤務するにあたって感じるストレスを男女別に示した。男性では、「職業的自立・専門性」に分類される「自分自身の考える薬剤師像とギャップがある（理想と現実の違い）」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に低かった（ $p < 0.05$ ）。一方、「勤務環境」に分類される「職場の人間関係」「薬剤師間でケアの意見交換をする余裕がない」「勤務体制（拘束時間が長い）」および「休みをとりにくい」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった（ $p < 0.01$ または $p < 0.05$ ）。女性では、「基本的業務」に分類される「事務処理（書類作成など）に関すること」並びに「雇用・将来」に分類される「配置転換、転勤、頻回の応援や出向」および「昇進、昇格について」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に低かった（ $p < 0.01$ または $p < 0.05$ ）。一方、「勤務環境」に分類される「薬剤師間でケアの意見交換をする余裕がない」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。

表 4-1 および 4-2 に対象者の分類されたストレス要因のストレス総合点を男女別に示した。男性では、「勤務環境」のストレス総合点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。一方、女性では、いずれの要因のストレス総合点も、病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差はなかった。

表 1-1 男性対象者のストレスの原因と考えられる因子の素点

	病院薬剤師 (N=150)	薬学公務員 (N=57)
心理的な仕事の負担 (量)+	9.3±0.2 (9.0～9.6)	8.5±0.3 (7.9～9.1)
心理的な仕事の負担 (質)**	9.6±0.1 (9.4～9.9)	8.6±0.2 (8.2～9.0)
自覚的な身体的負担度**	2.6±0.1 (2.5～2.8)	1.7±0.1 (1.5～1.9)
職場の対人関係でのストレス**	6.9±0.1 (6.6～7.1)	6.0±0.2 (5.6～6.4)
職場環境によるストレス	2.2±0.1 (2.0～2.3)	2.4±0.1 (2.2～2.6)
仕事のコントロール度*	7.4±0.1 (7.1～7.6)	8.0±0.2 (7.5～8.4)
あなたの技能の活用度++	3.0±0.1 (2.9～3.1)	2.5±0.1 (2.3～2.7)
あなたが感じている仕事の適性度	2.8±0.1 (2.7～2.9)	2.8±0.1 (2.6～2.9)
働きがい	2.9±0.1 (2.8～3.0)	2.8±0.1 (2.7～3.0)

平均値±標準誤差 (95%信頼区間：下限～上限)，年齢を調整
2群の差：*p<0.05, **p<0.01 (共分散分析)，+p<0.05, ++p<0.01 (分散分析)

表 1-2 女性対象者のストレスの原因と考えられる因子の素点

	病院薬剤師 (N=152)	薬学公務員 (N=18)
心理的な仕事の負担 (量)	9.0±0.1 (8.7～9.3)	9.2±0.4 (8.3～10.0)
心理的な仕事の負担 (質)	9.3±0.1 (9.1～9.6)	8.6±0.4 (7.9～9.3)
自覚的な身体的負担度**	2.7±0.1 (2.6～2.8)	1.7±0.2 (1.3～2.0)
職場の対人関係でのストレス**	6.7±0.1 (6.5～6.9)	5.6±0.3 (5.0～6.2)
職場環境によるストレス	2.2±0.1 (2.1～2.3)	2.5±0.2 (2.1～2.9)
仕事のコントロール度	7.3±0.1 (7.0～7.6)	7.5±0.4 (6.7～8.4)
あなたの技能の活用度*	3.0±0.1 (2.8～3.1)	2.5±0.2 (2.2～2.9)
あなたが感じている仕事の適性度	2.9±0.0 (2.8～3.0)	2.8±0.1 (2.5～3.0)
働きがい	3.0±0.1 (2.9～3.1)	2.9±0.1 (2.6～3.2)

平均値±標準誤差 (95%信頼区間：下限～上限)，年齢を調整
2群の差：*p<0.05, **p<0.01 (共分散分析)

表 2-1 男性対象者のストレス緩和因子の素点

	病院薬剤師 (N=149)	薬学公務員 (N=57)
上司からのサポート	7.9±0.2 (7.5～8.2)	8.3±0.3 (7.7～8.8)
同僚からのサポート	8.4±0.1 (8.1～8.7)	8.2±0.2 (7.8～8.7)
仕事の満足度**	2.7±0.1 (2.6～2.8)	3.0±0.1 (2.8～3.1)
家庭生活の満足度	3.0±0.1 (2.9～3.1)	3.2±0.1 (3.0～3.4)
仕事や生活の満足度*	5.7±0.1 (5.6～5.9)	6.2±0.1 (5.9～6.4)

平均値±標準誤差 (95%信頼区間：下限～上限)，年齢を調整
2群の差：*p<0.05, **p<0.01 (共分散分析)

表 2-2 女性対象者のストレス反応緩和因子の素点

	病院薬剤師 (N=151)	薬学公務員 (N=18)
上司からのサポート	7.9±0.2 (7.6～8.2)	8.1±0.5 (7.2～9.0)
同僚からのサポート	8.5±0.2 (8.2～8.8)	8.2±0.4 (7.3～9.0)
仕事の満足度	2.7±0.1 (2.6～2.8)	2.9±0.2 (2.6～3.2)
家庭生活の満足度	2.9±0.1 (2.8～3.0)	3.2±0.1 (2.9～3.5)
仕事や生活の満足度	5.6±0.1 (5.5～5.8)	6.0±0.2 (5.6～6.5)

平均値±標準誤差 (95%信頼区間：下限～上限)，年齢を調整

考 察

本調査の病院薬剤師および薬学公務員の年齢調整した平均睡眠時間は、男性では病院薬剤師 (6.2時間) と薬学公務員 (6.3時間) で有意差はなかったが、女性では病院薬剤師 (6.0時間) が薬学公務員 (6.6時間) より有意に短かった。病院薬剤師および男性の薬学公務員の睡眠時間は、過重労働が問題化している大規模病院に勤務する医師と同程度となっており⁴⁾、注意していく必要がある。

調査対象者の平均年齢は、男性の薬学公務員で高くなっていった。病院薬剤師は、数年間勤務した後に20代後半の女性を中心に薬局へ転職するという傾向⁵⁾が影響し

ている可能性がある。男女とも病院薬剤師では対人関係のストレスが大きくなっており、こうしたストレスや仕事の満足度の低さが転職の原因となっていることもあると考える。職場の勤務環境について評価する場合には、離職率も考慮する必要がある。

仕事でストレスを感じていると回答した対象者の割合は、男女共に病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差はなく、83.3～100.0%であった。厚生労働省の調査⁶⁾では、仕事や職業生活に関して強い不安や悩み、ストレスがあると回答した労働者の割合は約60%であったことから、病院薬剤師のみならず薬学公務員においても仕事でストレスを感じている者の割合はかなり高率といえよう。

著者らは、本研究で病院薬剤師および薬学公務員の職

表 3-1 男性対象者の勤務するにあたってのストレス

ストレス要因		病院薬剤師 (N=151)	薬学公務員 (N=57)
基本的業務	仕事の責任が重い	3.3±0.1 (3.2 ~ 3.4)	3.1±0.1 (2.9 ~ 3.3)
	仕事のノルマ達成に関すること(仕事の割り当てや経営面への貢献)	2.8±0.1 (2.7 ~ 2.9)	2.7±0.1 (2.5 ~ 2.9)
	事務処理(書類作成など)に関すること	2.8±0.1 (2.7 ~ 2.9)	2.9±0.1 (2.7 ~ 3.0)
職業的自立・専門性	自分の知識・技術・経験不足による不安がある	2.9±0.1 (2.8 ~ 3.0)	2.7±0.1 (2.6 ~ 2.9)
	自分自身の考える薬剤師像とギャップがある(理想と現実の違い)*	2.6±0.1 (2.5 ~ 2.7)	2.8±0.1 (2.7 ~ 3.0)
	薬剤師として無力感を感じる	2.6±0.1 (2.4 ~ 2.7)	2.4±0.1 (2.2 ~ 2.6)
	薬剤師としてのプライドを傷つけられる	2.1±0.1 (2.0 ~ 2.2)	2.1±0.1 (1.9 ~ 2.2)
勤務環境	職場の人間関係**	2.5±0.1 (2.4 ~ 2.6)	2.1±0.1 (1.9 ~ 2.3)
	職場の人手が十分でない	3.1±0.1 (3.0 ~ 3.3)	3.0±0.1 (2.7 ~ 3.2)
	薬剤師間でケアの意見交換をする余裕がない*	2.6±0.1 (2.5 ~ 2.7)	2.3±0.1 (2.1 ~ 2.5)
	勤務体制(拘束時間が長い)**	2.7±0.1 (2.5 ~ 2.8)	2.2±0.1 (2.0 ~ 2.4)
	休みをとりにくい**	2.8±0.1 (2.6 ~ 2.9)	2.3±0.1 (2.0 ~ 2.5)
	職場の物理的な条件(スペース, 騒音, 空調など)	2.4±0.1 (2.2 ~ 2.5)	2.3±0.1 (2.1 ~ 2.5)
雇用・将来	配置転換, 転勤, 頻回の応援や出向	2.0±0.1 (1.9 ~ 2.1)	2.2±0.1 (2.0 ~ 2.4)
	努力に比較して低い報酬	2.7±0.1 (2.6 ~ 2.9)	2.7±0.1 (2.5 ~ 2.9)
	昇進, 昇格について	2.4±0.1 (2.3 ~ 2.6)	2.5±0.1 (2.3 ~ 2.7)
	仕事の将来性	2.7±0.1 (2.5 ~ 2.8)	2.8±0.1 (2.6 ~ 3.0)
	雇用に対する不安	2.4±0.1 (2.2 ~ 2.5)	2.2±0.1 (2.0 ~ 2.4)
	定年後の仕事, 老後	2.6±0.1 (2.5 ~ 2.8)	2.8±0.1 (2.6 ~ 3.1)

平均値±標準誤差(95%信頼区間:下限~上限), 年齢を調整

2群の差:*p<0.05, **p<0.01(共分散分析)

表 3-2 女性対象者の勤務するにあたってのストレス

ストレス要因		病院薬剤師 (N=152)	薬学公務員 (N=18)
基本的業務	仕事の責任が重い	3.1±0.0 (3.0 ~ 3.2)	3.0±0.1 (2.7 ~ 3.3)
	仕事のノルマ達成に関すること(仕事の割り当てや経営面への貢献)	2.5±0.1 (2.4 ~ 2.6)	2.7±0.2 (2.3 ~ 3.0)
	事務処理(書類作成など)に関すること++	2.4±0.1 (2.3 ~ 2.5)	3.0±0.2 (2.7 ~ 3.3)
職業的自立・専門性	自分の知識・技術・経験不足による不安がある	3.3±0.0 (3.2 ~ 3.4)	3.2±0.1 (2.9 ~ 3.5)
	自分自身の考える薬剤師像とギャップがある(理想と現実の違い)	2.7±0.1 (2.6 ~ 2.8)	3.0±0.2 (2.6 ~ 3.4)
	薬剤師として無力感を感じる	2.7±0.1 (2.6 ~ 2.8)	2.4±0.2 (2.1 ~ 2.7)
	薬剤師としてのプライドを傷つけられる	2.1±0.0 (2.0 ~ 2.2)	1.9±0.1 (2.0 ~ 2.2)
勤務環境	職場の人間関係	2.6±0.1 (2.4 ~ 2.7)	2.3±0.2 (2.0 ~ 2.7)
	職場の人手が十分でない	3.0±0.1 (2.9 ~ 3.2)	3.3±0.2 (2.9 ~ 3.7)
	薬剤師間でケアの意見交換をする余裕がない*	2.6±0.1 (2.5 ~ 2.7)	2.2±0.2 (1.8 ~ 2.5)
	勤務体制(拘束時間が長い)	2.5±0.1 (2.4 ~ 2.6)	2.5±0.2 (2.1 ~ 2.9)
	休みをとりにくい	2.7±0.1 (2.5 ~ 2.8)	2.6±0.2 (2.2 ~ 3.0)
	職場の物理的な条件(スペース, 騒音, 空調など)	2.3±0.1 (2.2 ~ 2.5)	2.7±0.2 (2.3 ~ 3.0)
雇用・将来	配置転換, 転勤, 頻回の応援や出向**	1.8±0.1 (1.7 ~ 1.9)	2.6±0.2 (2.0 ~ 2.9)
	努力に比較して低い報酬	2.5±0.1 (2.4 ~ 2.7)	2.7±0.2 (2.3 ~ 3.1)
	昇進, 昇格について*	2.2±0.1 (2.1 ~ 2.3)	2.6±0.2 (2.2 ~ 2.9)
	仕事の将来性	2.6±0.1 (2.5 ~ 2.7)	2.6±0.2 (2.2 ~ 2.9)
	雇用に対する不安	2.3±0.1 (2.2 ~ 2.5)	2.3±0.2 (1.9 ~ 2.6)
	定年後の仕事, 老後	2.4±0.1 (2.3 ~ 2.6)	2.8±0.2 (2.4 ~ 3.2)

平均値±標準誤差(95%信頼区間:下限~上限), 年齢を調整

2群の差:*p<0.05, **p<0.01(共分散分析), ++p<0.01(分散分析)

業性ストレスを把握するために、旧労働省が作成した職業性ストレス簡易調査票³⁾のみならず中嶋ら¹⁾が保険薬局薬剤師の職業性ストレス把握用に独自に開発した調査票の一部を用いた。

本研究の男性では、年齢を調整したストレスの原因と考えられる因子の素点に関して、「心理的な仕事の負担(量)」「同(質)」「自覚的な身体的負担度」および「職場の

対人関係でのストレス」得点が、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高く、「仕事のコントロール度」得点も、病院薬剤師が薬学公務員より有意に低かった。さらに年齢を調整したストレス緩和因子の素点でも、「仕事の満足度」および「仕事や生活の満足度」得点は、病院薬剤師が薬学公務員より有意に低かった。一方、女性では、年齢を調整したストレスの原因因子の素点に関して、「自覚

表 4-1 男性対象者の分類されたストレス要因のストレス総合点

	病院薬剤師 (N=150)	薬学公務員 (N=57)
基本的業務	8.8±0.1 (8.6～9.1)	8.6±0.2 (8.2～9.0)
職業的自立・専門性	10.2±0.2 (9.9～10.5)	10.0±0.3 (9.5～10.6)
勤務環境**	16.0±0.2 (15.5～16.5)	14.0±0.4 (13.2～14.8)
雇用・将来	14.9±0.3 (14.4～15.4)	15.0±0.4 (14.2～15.9)

平均値±標準誤差 (95%信頼区間：下限～上限)，年齢を調整

2群の差：** p<0.01 (共分散分析)

表 4-2 女性対象者の分類されたストレス要因のストレス総合点

	病院薬剤師 (N=152)	薬学公務員 (N=18)
基本的業務	8.1±0.1 (7.8～8.3)	8.6±0.4 (7.9～9.4)
職業的自立・専門性	10.8±0.1 (10.5～11.0)	10.5±0.4 (9.6～11.3)
勤務環境	15.8±0.2 (15.3～16.3)	15.6±0.8 (14.1～17.1)
雇用・将来	13.9±0.3 (13.3～14.4)	15.4±0.8 (13.8～16.9)

平均値±標準誤差 (95%信頼区間：下限～上限)，年齢を調整

的な身体的負担度」および「職場の対人関係でのストレス」得点が、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった。しかし、年齢を調整したストレス緩和因子に関して、いずれの項目の素点も、病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差はなかった。以上の結果から、ストレス度は、特に男性では病院薬剤師が薬学公務員より高いと考えられる。幸い、男女ともに病院薬剤師の「技能の活用度」得点は、薬学公務員より有意に高く、病院薬剤師のストレス度を多少低下させていると考えられる。

以上の結果を用いて仕事のストレス判定図から読み取った「総合した健康リスク」³⁾でも、女性では病院薬剤師と薬学公務員で差がなかったが、男性では病院薬剤師が薬学公務員よりやや高かった。しかし、「総合した健康リスク」の平均は、病院薬剤師、薬学公務員は共に、男女を問わず100前後であり、全体的には特に問題となるレベルではないと考えられる。今後、特に男性の病院薬剤師の健康リスクをさらに下げするために、各病院の薬剤師数を増加させることや、上司や同僚のサポートをさらに高めること、研修の機会を提供してスキルを高めてもらうことなどが期待される。

なお、男性病院薬剤師の「総合した健康リスク」の平均は、著者らが2007年に調査した大規模病院男性勤務医(114.7%)⁷⁾より低かった。一方、女性病院薬剤師の「総合した健康リスク」の平均は、著者らが2009年に調査した中規模病院の経験年数1年以上の女性看護師(85.3%)⁸⁾より高かった。

勤務するにあたって感じるストレスに関して、調査した19項目中、年齢を調整した平均点が最も高かった項目は、男性では病院薬剤師、薬学公務員共に「仕事の責任が重い」であった。しかし、女性では病院薬剤師が「自分の知識・技術・経験不足による不安がある」、薬学公務員が「職場の人手が十分でない」と病院薬剤師と薬学公

務員の間で差がみられた。

ところで、感じるストレスが「あまりない」、 「まったくくない」には、それぞれ2点、1点が与えられているため、平均点が2.0点以下の項目は、概してストレスにならないと考えられる。調査した19項目中、年齢を調整した平均点が2.0点以下であった項目は、病院薬剤師では男女共に「配置転換、転勤、頻回の応援や出向」であった。一方、薬学公務員では、男性では該当項目はなかったが、女性では「薬剤師としてのプライドを傷つけられる」であり、男女共に病院薬剤師と薬学公務員の間で差がみられた。

以上の結果は、特に女性において、病院薬剤師と薬学公務員の間で勤務するにあたって感じるストレスに違いがあることを示唆している。

男性対象者では、5項目のストレスに関して、感じる度合いが病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差が認められた。具体的には、「勤務環境」に分類される「職場の人間関係」「薬剤師間でケアの意見交換をする余裕がない」「勤務体制(拘束時間が長い)」および「休みをとりにくい」ストレス度合いが、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった。一方、「職業的自立・専門性」に分類される「自分自身の考える薬剤師像とギャップがある(理想と現実の違い)」ストレス度合いは、逆に薬学公務員が病院薬剤師より有意に高かった。

女性対象者では、4項目のストレスに関して、感じる度合いが病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差が認められた。具体的には、「勤務環境」に分類される「薬剤師間でケアの意見交換をする余裕がない」ストレス度合いが、病院薬剤師が薬学公務員より有意に高かった。一方、「基本的業務」に分類される「事務処理(書類作成など)に関すること」並びに「雇用・将来」に分類される「配置転換、転勤、頻回の応援や出向」および「昇進、昇格に

ついて」ストレス度合いは、逆に薬学公務員が病院薬剤師より有意に高くなっていた。

また、4分類したストレス要因の年齢を調整したストレス総合点をみると、男性では、病院薬剤師の「勤務環境」のストレス総合点が、薬学公務員より有意に高かった。一方、女性では、いずれの要因のストレス総合点も、病院薬剤師と薬学公務員の間で有意差はなかった。

今回、病院薬剤師の職業性ストレスの特性を明らかにする手始めとして薬学公務員との比較を行った。したがって今後の課題として、薬局薬剤師、医薬情報担当者、病院看護師、医師等、複数群との職業性ストレスの比較が残される。

いずれにせよ、薬剤師が勤務するにあたって感じるストレスの度合いには、「勤務環境」ストレスの度合いが、特に男性において、病院薬剤師と薬学公務員の間で差があることがわかった。

謝辞：データ整理を補助した奥村まゆみ氏に感謝する。なお、本研究は、平成25年度学術研究助成基金助成金、挑戦的萌芽研究 課題番号24659319により行った。

利益相反：利益相反基準に該当無し

文 献

- 1) 井奈波良一, 日置敦巳, 近藤剛弘, 他: 病院薬剤師の職業性ストレス. 日職災医誌 62 (5): 322—327, 2014.
- 2) 中嶋正憲, 西口工司, 三木純平, 藤堂博美: 保険薬剤師の職業性ストレスの現状について. 日薬誌 60 (4): 483—

488, 2008.

- 3) 「作業関連疾患の予防に関する研究」研究班: 労働省平成11年度労働の場におけるストレス及びその健康影響に関する研究報告書. 東京, 東京医科大学衛生学公衆衛生学教室, 2000.
- 4) 井奈波良一, 井上真人, 日置敦巳: 大規模自治体病院の男性勤務医のバーンアウトと勤務状況, 職業ストレスおよび対処特性の関係. 日職災医誌 58 (5): 220—227, 2010.
- 5) 山本展裕, 内山 充: 日本における薬剤師需給の予測に関する研究. 薬学雑誌 122 (5): 309—321, 2002.
- 6) 厚生労働大臣官房統計情報部雇用・賃金福祉統計課賃金福祉統計室: 平成24年「労働安全衛生特別調査(労働者健康状況調査)」の概況. 2013年9月19日, http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/h24-46-50_05.pdf (accessed 2016-09-13).
- 7) 井奈波良一, 黒川淳一, 井上真人: 大規模自治体病院医師の勤務状況, 日常生活習慣および職業性ストレス. 日職災医誌 56 (6): 239—245, 2008.
- 8) 井奈波良一, 井上真人: 女性看護師のバーンアウトと職業性ストレスの関係—経験年数1年未満と1年以上の看護師の比較—. 日職災医誌 59 (3): 129—136, 2011.

別刷請求先 〒501-1194 岐阜市柳戸1-1
岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野
井奈波良一

Reprint request:

Ryoichi Inaba
Department of Occupational Health, Gifu University Graduate School of Medicine, 1-1, Yanagido, Gifu, 501-1194, Japan

Study on the Work-related Stress Among Hospital Pharmacists Report 2 Comparison with Administrative Pharmacists

Ryoichi Inaba¹⁾, Atsushi Hioki²⁾ and Mitsuhiro Nakamura³⁾

¹⁾Department of Occupational Health, Gifu University Graduate School of Medicine

²⁾Clinical Division, Matsunami General Hospital

³⁾Laboratory of Drug Informatics, Gifu Pharmaceutical University

This study was designed to evaluate the degree of the work-related stress among hospital pharmacists. A self-administered questionnaire survey on the related determinants was performed among 314 hospital pharmacists (154 males and 160 females) and 76 administrative pharmacists (58 males and 18 females), and results obtained were compared between them.

The results obtained were as follows:

1. Among both males and females, there were no significant differences between hospital pharmacists and administrative pharmacists in the proportion of subjects who feel stressful at work.

2. After adjustment for age, there were significant differences between hospital pharmacists and administrative pharmacists in the scores of 'physical demands' and 'interpersonal conflict' considered as the causes of the stress among both males and females.

3. The total health risks read from the figure for judgments of the work-related stress in hospital pharmacists and administrative pharmacists were 104.5 and 92.1 in males and 96.6 and 96.8 in females for 100 of the standard group, respectively.

4. After adjustment for age, total score of stress items concerning 'work environment' was significantly higher in male pharmacists than in male administrative pharmacists ($p < 0.01$). On the other hand, there were no significant differences in any total score of the stress items between female hospital pharmacists and female administrative pharmacists.

These results suggest that there were significant differences in the work-related stress felt by pharmacists between hospital pharmacists and administrative pharmacists especially in males.

(JJOMT, 66: 149—155, 2018)

—Key words—

pharmacist, hospital, work-related stress